

「地域コーディネーター」とともにシニアの居場所づくりを支援

●近江八幡市社会福祉協議会 ボランティアセンター [滋賀県]
http://www.hottv.ne.jp/~h001/sya01.html



地域コーディネーター養成講座では面接技術を重視

退職男性の地域生活を支援

滋賀県の中央、琵琶湖の東に位置する近江八幡市は、高度成長期に京都・大阪のベッドタウンとして急速に発展、勤労世代が流入した。ここでも現在、退職前後の年齢に達する男性住民が増えている。

同市では健康推進課や高齢福祉・介護課を中心に、退職男性の介護予防、居場所や仲間づくり等、地域社会でいきいきと暮らしていくためのしくみづくりについて検討を進めてきた。市社協においても、市から「退職後男性閉じこもり予防事業」の委託を受け、講座活動などに取り組んでいる。その市社協が、滋賀県社協から委託を受けて実施しているのが、「高齢者エンジョイ地域活動モデル事業」である。

“先輩”に「地域コーディネーター」になってもらう

モデル事業では平成16（2004）年、企画委員会とワーキンググループを設置し、事業の方向性や具体的な進め方を討議した。企画委員会には県社協・市社協のほか、行政各課責任者やNPO、有識者が、ワーキンググループには同じく県社協・市社協・NPOに行政の担当職員が参画した。議論の中で、各担当課・組織間の連携や窓口の一元化、退職高齢者が地域活動に定着するためのコーディネート機能の必要性などが確認された。

検討結果を受け、市社協ボランティアセンター（以下「Vセンター」）は今年1月、すでに地域で活動している“先輩”の退職男性を対象に、退職高齢者に対する地域活動への働きかけを行う「地域コーディネーター」（以下「コーディネーター」）の養成研修会をNPOとともに実施した。さらに希望した受講者にはコーディネーターとして、実際に“後輩”たちへの働きかけにあたってもらうことにした。

地域活動団体の実態把握と「地域活動相談」

コーディネーターの実践研修の場を兼ねて、2月に、“後輩”である退職男性に地域活動のヒントを見つけて

もらう「地域福祉講座」を開催。里山保全活動の体験を通して、地域活動の楽しさ、その基礎や心構えを学んでもらった。

モデル事業2年目となる今年度はまず、コーディネーターが地域で活動している団体の実態把握に取り組んだ。退職男性の活動に適したものかどうかを調べ、情報を整理し紹介する冊子を作成した。

7月からは、Vセンターで「地域活動相談」をスタート。「退職後に何か活動したいがどうしたらいいかわからない」「市内にはどんな活動があるのか」という退職男性を対象に、16名のコーディネーターが、自らの経験を活かし、ふさわしい地域活動への橋渡しをするため、毎週月曜日に相談を受けている。

コーディネーターとボランティアセンターが相互にサポート

「地域コーディネーターという新しい仲間ができ、ボランティアセンターでも地元の各種活動の情報をより把握できるようになりました」（同市社協・谷口花菜さん）。本事業によって、市社協では行政や地域シニア層と新たなつながりができている。

今後も市社協では、このコーディネーターの事業を継続し、市内のシニア層の地域活動をより活性化するとともに、彼らを地域活動につなぐしくみづくりに引き続き取り組んでいきたいと考えている。コーディネーターの出番はこれからさらに増えていくことだろう。



地域活動の“先輩”たちが親身になって相談に応える

高年齢社会の旗手 シニアが活躍できる 環境づくり

特集

少子・高齢社会に突入した日本社会では、シニア層の多方面にわたる活躍が期待されると同時に、喫緊の課題にもなっています。折りしも「団塊の世代」と呼ばれるボリュームゾーンを構成する世代が、60歳の定年の時期にさしかかろうとしています。ボランティア・市民活動の観点から見ると、職業生活から地域生活へのスムーズな移行のための支援や、活力あるシニア層が地域活動で十分に活躍できる環境を整えることが、これからの地域社会の活性化に大きな意味をもつと考えられます。事例を通して、シニアが活躍できる環境づくりに向けた取り組みについて考えます。

NPOと協働してシニア世代のITサポーターを養成

●日本電気株式会社 社会貢献室 [東京都]
http://www.nec.co.jp/community/ja/welfare/seniorpc.html



各地の活動者が集まった「人と人をつなぐITを考える」フォーラム

世界15万従業員による社会貢献活動

東京都港区に本社を置く大手電気メーカー、日本電気株式会社（以下、NEC）は、「CSR推進本部社会貢献室」を社内へ設け、地球環境保全／青少年教育／社会福祉／芸術・文化・スポーツの4つの分野で様々な社会貢献活動を推進している。また、平成11（1999）年からは、世界約15万人にのほろグループ社員が参画し、それぞれのコミュニティで展開する地域貢献運動「NEC Makes a Difference」運動を始めている。社会福祉の分野における取り組みの一つとして平成14（2002）年にスタートしたのが、「NECシニアITサポーター養成講座」である。

「NECシニアITサポーター養成講座」

これは、「地域社会でITを活用したいが、きっかけがない」という身体障害者・高齢者に対して、そのサポートができる人材を養成するプログラムである。ITスキルがあるシニア世代を対象に、各地のNPOと協働し、障害者団体や社協、教育委員会などの後援を得ながら、月1回ほどのペースで実施している。NPOが自主的的事业として、養成後のフォローアップや活動の具体的なマネジメントまで担当し、NECはその事業に対してプログラムや広報、資金面での支援などにあたる。



サポーター養成講座では障害者自身も指導にあたる

2日間のカリキュラムにはパソコン操作技術の指導法なども含まれるが、中心はITサポーターとしての心構えやホスピタリティについて。プロジェクターの使用法から、どうサポートすれば相手に喜ばれるか、身だしなみにいたるまで指導する。シニア世代の社会貢献活動を促進すると同時に、障害者や高齢者の豊かなデジタルライフを支援しようという試みである。

NPO研修と子育てママ向け講座

NECでは、この事業をさらに広く全国で展開するため、各地で講座を継続的に実施できる団体の育成に着目、サポーター養成のスキルを磨く「シニアITサポーターNPO研修」を並行して開催している。現在までに認定されたNPOは5団体。今後も講座を担う団体の育成とその後の支援に務めていく予定である。

講座の修了者は、自分と同じシニア世代の指導にあたるだけではない。NECでは再就職をめざす子育て世代の女性を対象にした「子育てママのためのIT講座」を実施しているが、ここではシニアITサポーターたちが講師として活躍している。

全国フォーラムで新たな輪を広げる

「本事業を自ら企画・実施していけるNPO団体が各地に増えれば、この活動はもっと広がっていくだろう」（NEC・井上忠志さん）。そうした団体の発掘と、各地のシニアITサポーター・団体どうしの交流とスキルアップに役立ててもらおうと、今年8月には「SITS（シニアITサポーター）フォーラム in 東京」を開催。全国から200名あまりが参加した。

今後、活動をより広げていくにあたって、各地の団体を束ねる中間支援的なNPO団体の必要性をNEC社会貢献室では感じている。専任スタッフを常駐させることができ、NECとビジョンを共有できる組織が整えば、定年退職者が増え、高齢化の進む現在、シニアITサポーター事業のさらなる展開が期待できるだろう。

モデル事業のおかげで知ったシニアの関心、地域活動の実態

近江八幡市社会福祉協議会 ボランティアセンター ボランティアコーディネーター 谷口花菜さん

近江八幡市では、健康推進課を中心に高齢者向けの企画に力を入れています。市社協が委託を受けた事業の他、「おやじ道場」という、気軽に仲間づくりを体験してもらうサロンなども実施しています。市社協でも市と協力しあいながらこれまでやってきました。

「地域活動相談」は、各講座の場を借りて周知したり、チラシやポスターの他、ケーブルTVにコーディネーター自身や社協職員が出演して紹介しました。「こういう場には男性はなかなか来ないのでは」と不安もありましたが、始めてみて、

「退職後、地域で何かしたい」と思っている方が少なくないことが実感としてわかりました。

当市は、市街地を少し離れると昔ながらのどかな里山や水郷が広がるまちで、環境活動がさかんです。市外に通動していた退職男性は、住んでいる地元のことをあまり知りません。そういう方だからこそ「これからは身近な自然を守る活動をしたい」という気持ちがあるようです。意外だったのは、男性が子育て支援に積極的で、楽しんでおられることです。それもこの事業のおかげでわかったことで、勉強になり、新しい企画の参考にもなります。

子育て時期によそから市内に移ってこられた方たちは、地域とのつながりがあり、退職後は居場所や役目がありません。そういう層に対してはピンポイントの事業だったかなと思います。そんな方たちが居場所を探したいという時に、すぐにその手助けとなる窓口がわかれば、地域活動の参加者も増え、もっと元気な地域になると思います。

シニアの地域社会への軟着陸を支援したい

日本電気株式会社 CSR推進本部 社会貢献室 フィランソロビーエキスパート 井上忠志さん

数年前、定年退職を控えたある方から、「実は私、障害者向けのパソコン指導をしています。これから定年退職者は増えます。シニアが参画できるプログラムをつくれませんか」と相談を受けました。まだ自分では、2007年問題など深刻には考えていない頃でした。

ところが、その方の活動を見学させていただくと、視覚障害者にパソコン指導をするだけでなく、障害者自身が講師を務めています。「障害があっても支援を受けるだけではない」という当たり前の事実を実感しました。その後「NEC

の社員に対して、退職後に地域社会に軟着陸するきっかけになるような企画を」と、この講座を始めました。ですから最初は自社の社員向けで、その後社外に公開にしたわけです。

会社勤めをしてきたシニアは地域社会に出ていく術を知らず、地域の壁は厚い。軟着陸するには、彼らをサポートする受け皿が必要です。現場に出なければ地域と会社の文化の違いを知ることもできません。これから定年を迎える人はメールくらいなら扱えます。「自分も何かできるかな」と参加してくれたら、仲間や居場所ができ、自分の役割ができて自己肯定感が生まれます。

各地域でシニア向けの講座が企画されていますが、講座だけで終わってしまう場合も少なくないように感じます。研修を受けて何か活動する気になっても、十分なケアがなければ意欲は続きません。活動の内容は何であれ、まずは仲間づくりまでをサポートできれば、その後は自然に自己回転が始めるのだと思います。



「地域人」となったシニアの力を 地域で活かすために

渡邊一雄さん 全国ボランテア活動振興センター運営委員／
社会福祉法人奉優会特別養護老人ホーム等々力の家 常務理事・施設長

企業のアメリカ法人社長として滞米中にフィランソロピーと出会い、退職後、「東大病院にここボランテア」代表世話人などを務め、企業及び企業人の社会貢献活動の普及に努めてこられた渡邊一雄さんに、企業人が退職後に地域活動に参加するための心構えと、シニアの地域活動を推進するための環境づくりについて伺いました。

チェック!

地域で楽しく活躍するシニアからのアドバイス
「地域人」になるために、
定年前にすべきこと

仕事一筋の企業人から仕事を取ったら何が残るだろう? 「地域人」といっても、住んでいるというだけで簡単になれるものではない。地域社会でいきいきと暮らすために、シニア予備軍が定年までしておくべきことは、大きく三つ。

◆「自分探し」をしておこう!

自分が情熱を持てるもの、夢中になれるものは何か? 趣味はいずれ飽きがるし、人生後半の感動を与えない。元気であれば、社会の役に立つことを考えよう。そのとき自分に、「人の役に立つ能力=『個人力』があるか?」を振り返ってみることが大切。

◆「個人力」を身につけよう!

会社の中だけでなく、世間に出て通用する「個人力」を身につけるための6項目。

【①基礎体力づくり】個人力の第一は「耐える力」。

批判に耐える力を持ち、常に笑顔を保つ努力が大事。

自分の生きがい、信念という座標軸を確かなものにしよう。

【②自己完結性】もう組織も部下もない。何でも自分でできるようになろう。

【③スペシャリストになる】「自分はこれならできる」という得意技を持とう。

さらに資格があれば地域活動にも入っていきやすい。

【④仲間外れを恐れない】会社時代が終わったら、個としての自分が主役。孤独に耐えることを覚えよう。

【⑤違いを認める】他人は他人、自分は自分。余計な批判はせず、自分のなすべきことをしよう。

【⑥自慢話には特に注意】知らぬ間にしてしまうのが自慢話。

会話の基本を学び、自分のアピールの仕方に配慮すれば人間関係はスムーズになる。

◆ネットワークを大切にしよう!

利害が絡むような会社時代のつきあいはもう不要。家族をはじめ、本当に大事な友人が少しでもいれば、その関係を大切に。そんな友人を増やすきっかけとなるのが、V活動のよいところ。

シニアは何を求めているか? 活動しやすい環境づくりのために

福祉関係者は、企業や企業人（退職者を含めて）を相手にするのが得意でないように思える。企業の営利活動とは活動の性格が違うし、若いスタッフは退職高齢者が求めていることがわからない。退職高齢者が仕事中心の生活から地域生活にスムーズに移行し、その力を地域で活かせる環境づくりには、次の三つが大切である。

①シニアに対してはシニアに働きかけてもらう

同じ境遇にある当事者がニーズを一番よく知っている。本気で取り組んでくれる同世代の人材を、地域で発掘する必要がある。

②シニアの心に訴えるプログラムを

高齢者はそれぞれにみな悩みを抱えている。一般に高齢者が切実に興味を持つテーマは、まず健康、次にお金（老後のファイナンシャル・プラン）、そして心=生きがいの三つである。前者二つは対応を始めている企業もあるが、「心」の問題については不十分。人

の役に立ち、充実した老後を過ごしたいと考える人に対しては、まさにVコーディネーターの出番である。

③「一発」ではダメ

単発の講座などではなく、ホップ・ステップ・ジャンプを考える。「自分探し」「個人力をつける」までを導いたら、Vコーディネーターは彼らを活動の現場に実際に連れて行く。そうすれば、シニアは自分にできる活動を自ら選び参加していくようになるだろう。

退職後の新たな生きがいとして

これからのシニアは「新老人」。以前の世代と違い、不況やリストラで苦勞してきている一方で、会社では優秀でITを活用できる人が多い。V活動を推進する立場の間は、そうした人たちに、V活動は生きがいにつながるということを伝えなくてははいけない。納得してもらえば、具体的な活動は自らつくりあげるだけの能力がシニアにはあるはずである。